

略歴と業績

竹内 啓二

私の歩み—思い出を拾い集めて

徳島県板野郡上板町北高瀬に生まれる。上板町立松島小学校に通う。片道40分くらい歩いたところに学校があった。上板町は、北に讃岐山脈、南に吉野川、そして、四国山脈も望む。吉野川の中流で、河口まで車で1時間ほどのところ。四国八十八ヶ所札所で、5番と6番のあるあたりに位置する。周りは農家が多く、両親は、戦後何もなかったところから、小さな商売を始め、雑貨店をやっていたが、私が小学生のころからナリス化粧品（車で小売りして下さる方に商品を配達）と、呉服の販売を行っていた。6歳上の姉、5歳上の兄、1歳年下の弟の4人兄弟。家族は父母と兄弟4人の6人。同じ北高瀬には、母方の祖父母と親戚も住み、いとこや近所の子供たちと野原を楽しく遊んだ思い出がある。徳島名物の阿波踊りは、小学生の頃から、馴染んでいた。父は、戦後の大変な状況の中で、モラロジーに出会い、私が小学生の低学年のころ、1か月の本部講座を受講したことを、本部にいる父に向けて、そのころわが家に入ったテレビの絵を描いてはがきを送ったこととの関連で覚えている。

小学校時代の私は、本好きの少年で、図書室によく通い、偉人伝などもよく読んだ。エジソンの伝記を読んで、一時は発明にも関心をもったこともある。

地元の上板中学校で学んだが、中学時代はあまり勉強に熱心ではなく、柔道部に所属し、部長も務めた。いかに人生を生きるかと考えたり、詩を作ったり、絵を描いたりするようになった。

卒業後、地元の板野高校に進学したが、進路も含め、いろいろ悩むことがあり、一学期半ばで中退した。将来画家になりたいと思い、美術高校へ進学する希望で、徳島市内の絵画塾へバスで通い、油絵を習う。父から、麗澤高校のことを紹介され、関心をいただき、受験することにし、塾にも通い、受験勉強。幸い合格し、麗澤高校へ入学することができた。堀内一史先生は同級生である。高校では体操部に入る。1年生の1学期、英語で赤点を取り、再試験を受けたこともある。1年の1学期の慣れない寮生活でげっそりやせた。しかし、よき先輩、同級生に恵まれた。中道嘉彦先生は1年生の時の4寮の寮長であった。当時は全寮制で、全国各地からモラロジアンの子弟が入学していた。体操部に所属し、あん馬、吊り輪、マット、鉄棒などの練習もしたが、試合に出るほど

の力もなく、逆立ちで長い距離を歩くという特技を身に着けた。

当時、寮ごとに、麗澤大学の先生や研究所・学園の教職員をお招きし、お話しを聞くということを生徒主導で寮単位で行っていた。印象に残ったのは、黒川洋先生のお話（講演）であった。情報学という学問に基づいて、これからは情報の整理が大切というお話であったが、その熱意あふれる話しぶりと内容に強く引き付けられた。麗澤大学を志望する動機の一つになった。

高校3年の終わりに、主事（現在の校長）の上田茂先生の面接を受け、推薦で、麗澤大学外国語学部イギリス語学科へ進学。進学の動機は、モラロジーに関心があったことと、学校の雰囲気が気に入ったこと、多くの先生や先輩、同級生などとのよき出会いで、高校生活が居心地よく、また、成長させてもらったという思いとともに、さらに、もっとモラロジーを学び、自分を成長させたいというような思いがあった。また、英語を専門にがんばって、英語の力を生かす職業につこうという気持ちもあった。

大学時代は大変充実していた。課外活動では、ESSに入り、英語での会話やギャビン・バントク先生の演出による喜劇「トロイの木馬」の英語劇に出演したりした。谷川での英語のみを使う冬の合宿なども忘れがたい。

当時は全寮制で、部屋では、上級生と一緒に生活。一部屋に2、3名入っていた。中道先生、中山理先生、高巖先生とも同じ部屋になったことがある。夜の時間は、ESSの活動や英語劇の練習、「英文モラロジー」（廣池博士が書かれた『道徳科学の特質』の英訳版の輪読会。川窪啓資先生のお宅での月一回の会合）、ギャビン・バントク先生の指導による「詩の会」なども参加した。

1学期の終わりには、「山の会」に入り、授業が終わる、4時半ころから、学園の周辺を走り、仲間を背負って坂を上がり、グラウンドで腕立てなどのトレーニングをして、夕食を食堂で食べるという日課になった。そして、夏休みには、4、5日、日本アルプスの2500から3000メートル級の山々にテントと食料を担ぎ登山した。秋口にも山行を行った。5月の連休には、新入生を迎えて春山合宿を行った。梅田徹先生も山の会の後輩で、いっしょに山登りをした。

2年生の時には、山の会の部長になって、15名くらいの男女混合の部員とともに、日本アルプスなどの山に登った。大自然に触れるとともに、チームワークやグループで計画し準備し実行し、その結果を会報にして報告するといったことを学んだ。苦勞して登ることの達成感、自然の素晴らしさと怖さも味わった。この山の会での体験は、インド留学時の耐久生活に役立った。

2年生の終わりの春休みに外国語部長の割石虎雄先生に呼ばれて、進級ができないことを告げられた。一般教養科目で、人文科学、社会科学、自然科学の各分野に亘って履修しなければいけなかったのに、自然科学分野からは一科目も履修していなかったのが理由である。履修規則をしっかりと読んでいなかったこと、単位数さえ充たしていればよいと早飲み込みしてしまったことが

原因だった。2回目の2年次は、自然科学概論など、自然科学分野の科目を1科目とればよかった。親の仕送りの負担を少しでも補うことを考えてくださった学生部長の桑原忠行先生から、家庭教師のアルバイトを紹介していただいた。

この年、英語劇は「リア王」を公演し、私はリア王の重臣であるグロスター役という大きな役をいただいた。この練習の時、眼をつぶされたグロスターが舞台から階段を下りて観客席へと進むという場面で、現在の第二体育館の舞台から落ちかけたところを演出のバントク先生に間一髪抱きとめてもらったということがあった。もし大けがをしていたら、本番には出られなかったであろう。

大学時代には、このほかに吟詠同好会に所属し、渡辺三城先生のご指導を受け、中伝の段位まで昇段することができた。後に、インド留学中には、コルカタの大劇場で詩吟を披露する機会に恵まれた。現在も渡辺先生の設立した城学詩吟の会に所属し、詩吟を習い続けている。詩吟をやる学生を育てて、吟詠同好会を復活できなかったのは残念である。

絵の会にも所属し、宗武志先生からは、油絵の指導を受けた。草鞋の絵を描いたら、後年にも先生はそのことをよく覚えてくださっていた。現在は、絵を描くことはほとんどなくなったが、また、復活できたらと思う。高校浪人中から絵を指導してもらった徳島市で絵画塾を開いていた画家の清水亟典（じょうてん）先生に、「「絵ごころ」を忘れたらだめです」と年賀状で諭されたことが心に残っている。

2年生のころ、ESSの英語スピーチコンテストで、何回もすべてやっとなんと取った運転免許証取得の体験を作文し、スピーチをしたところ、優勝することができた。そして、勧められるがままに、「毎日デイリーニュース」の全国学生英語スピーチコンテストの関東予選に出て、関東地区の6名の代表の一人に選ばれた。竹橋の毎日新聞本社での全国大会に出場できたことは、自分のそれまで思ってもみなかった英語スピーチコンテストの世界に私を誘った。全国大会にはもう一度出場することができた。

2年生の時には、母から大学院に進学してもいいよと言われたので、大学院進学準備として、第二外国語としてフランス語のほか、ドイツ語も履修した。フランス語は通信教育でも勉強。当時、大学では教員が寮ごとに何人かの学生の生活、勉学、進路などの指導・アドバイスをする指導体制が実施され、私は黒川先生に指導いただいた。大学院進学のための勉強方法や受験情報の収集の方法、対策、さらには人生のこと、生き方のこと、モラロジーのことなどを教えていただいた。

すでに2年生頃から、モラロジー研究所研究部の研究会などに参加させてもらっていた。下程勇吉先生の研究会にも定期的に参加した。年に一回のモラロジー研究発表会にも参加した。大沢俊夫先生の指導も受けて、将来研究部に奉職することを前提に、大学院に進むということになった。

いくつか大学院を受験したが、唯一、筑波大学の修士課程地域研究研究科に合格できた。私のやろうとしたことは比較文化研究であったが、学部では、西洋思想を学んだので、インド思想を研究するということにした。指導教官は我妻和男先生（後に麗澤大学教授になられた）であった。一對一の指導で、ベンガル語も通信教育のようにして、丁寧に教えていただいた。2年間で、近代インド思想、特にヒンドゥー教の改革派の思想に関して修士論文を書き、修了した。土浦市の東郷食堂という食堂に下宿して、大学までバスで通った。

将来モラロジー研究所研究部に奉職するということで、聖人研究との関連で仏教研究も進めるように言われていた。そこで、サンスクリット語を筑波大学で学び始めた。神田明神のすぐそばにある中村元先生の東方学院では、仏教概論、インド思想を中村先生から学んだ。

筑波大学の修士課程を修了後、我妻先生のご指導で、インド西ベンガル州の州都コルカタから北に列車で4時間ほどの農村地帯にあるタゴール国際大学（通称シャンティニケトン〈平和の里〉）に留学することになった。タゴール国際大学では、国際寮に住み、博士論文の執筆を進めた。ベンガル語の文献も英語に翻訳して先生に訂正してもらうというやり方で読んだ。

毎日、停電が2時間はあり、水道も2時間くらい止まった。お昼は弁当をとったが、朝夕は自炊をした。洗濯も手洗い、エアコンはなく、扇風機は天井に大きなものがあつたが、停電のときはもちろん動かない。不便なことはあつたが、芸術、宗教、哲学に関すること、異文化理解に関することに触れて、学び、タゴール国際大学における3年間は、私を成長させてくれた。

インドから帰国し、モラロジー研究所の研究部（現在の研究センター）に奉職した。また、同時期に結婚し、二人の息子が誕生した。研究部では、多くの上司、先輩、同僚にご指導いただき、モラロジー研究、廣池千九郎研究を進めることができた。研究部長を務められた細川幹夫先生、望月幸義先生、永安幸正先生、北川治男先生、岩佐信道先生、立木教夫先生、所属した基礎理論研究室、比較文化研究室、人間学研究室の室長を務められた欠端實先生、松浦勝次郎先生、鈴木康之先生のお名前を特に挙げておきたい。

1992年に国際経済学部ができてから、大学の方が本務となり、研究部を兼務するということになった。比較思想、英語、基礎学際ゼミ、インド社会論、国際社会、専門ゼミ、道徳科学、経済経営フィールド演習（インド研修旅行）、大学院では、南アジア研究特論、比較思想研究、比較宗教研究、などを担当させていただいた。新入生の谷川セミナーハウスでの合宿は、なつかしく思い出す。6年くらい前から担当するようになった道徳科学は、学生にモラロジーや最高道徳の世界に興味をもってもらうとともに、身近な道徳の実践にも気づいてもらうよう努力している。

2002年8月～2003年8月の一年間、大学からアメリカに研究留学をさせて

いただいた。アメリカワシントンDCにあるジョージタウン大学ケネディ倫理研究所の客員研究員として、生命倫理、医療倫理、特にケアの倫理について研究させていただいた。大学近くの地下室の部屋を借りて、自炊をしながら一人で暮らした一年は、研究を深めるとともに国際的な視野を広げさせていただいた。日本、アメリカ、インドを比較する視野をもつことができたと思う。

1993年から、千葉県東葛地区・生と死を考える会に参加し、世話人、事務局長、副理事長という役割を担ってきた。大学教員の社会貢献活動として、長く関わってきた。この会は、水野治太郎麗澤大学名誉教授が代表、理事長として設立し、引っ張ってこられた会である。設立の趣旨は以下のとおりである。

一人ひとりが真に人間らしく輝いて生きるためには、老い・病・死にどのように向き合うかが問われています。当会（通称：NPO法人とうかつ・生と死を考える会）は、生と死をめぐる諸問題を率直に語り合い、学び合うとともに、ボランティア活動を通して、死別の痛み、病の苦しみを抱えている方々に寄り添い、自他のいのちの完成を目標に、豊かな社会づくりに寄与することを目指します。

また、次のような事業をしている。

1 生と死をめぐる社会教育事業

- ・毎月の例会 「月例講演会」「学習会」麗澤大学内教室（第三または第四土曜 14時～16時）
- ※ この月例の会合には、どなたでも参加できます。学生・教職員の方も自由に参加ください。詳細は当会のホームページ参照。
- ・大講演会（年二回予定）
- ・麗澤大学オープンカレッジに「ホスピス・ボランティア養成講座」を提供
- ・亡くなられた方々を偲ぶための「メモリアル・サービス（追悼音楽礼拝）」を開催

2 患者と家族を支援する事業

- ・「患者を支える会」という名称の活動グループで、松戸市、柏市、我孫子市の病院・施設・ホスピスでのボランティア活動（患者さんとその家族に、アロマ・トリートメントをしながら傾聴する）

3 死別体験者を支援する事業

- ・「柏市民活動センター」・「柏市地域医療連携センター」・「柏グリーフケア・センター」（当会事務所）などにて、死別の痛みの分かち合いの集いを毎月開催。東北に行き、東日本大震災の被災者に対する「こころのケア」も行った。
- ・「こころの相談室」（島村トータル・ケア・クリニック内）

4 広報・情報提供事業：会報（『ニューズレター』）の発行、関連書籍等の出版

これらの活動にかかわるようになり、死生学や生命倫理、医療倫理に研究を進めることにもなった。ケアの倫理、スピリチュアル・ケア、ナラティヴ・アプローチ、社会構成主義などへの研究は、この会の活動や水野先生の研究や講演に大きな影響を受けたことによる。

30年ほど前に、廣池学園、モラロジー研究所の教職員とその家族OBを会員とし、モラロジーの研修と実践をめざす廣池学園モラロジー事務所ができてから、研究部の先輩の鈴木康之先生から事務所の研修担当の幹事の一人になるように誘われて、かかわるようになった。維持員研修会、皇居勤労奉仕、日帰り旅行などの活動に総務として企画運営をやらせていただいた。鈴木康之先生からは、研究センターの人間学研究室の室長としてだけでなく、廣池学園モラロジー事務所研修担当代表幹事として、そのきっちりとした丁寧な仕事の進め方、態度から多くを学んだ。そして、副代表幹事、さらには代表幹事を務め、鈴木康之先生が亡くなってからは、長く代表幹事を務めることになってしまった。鈴木先生のように後輩を育て、次の世代につなげていくことができていないと思う。皇居勤労奉仕は麗澤大学の学生時代、昭和天皇の時代に2度参加させてもらったことを含め、廣池学園モラロジー事務所の皇居勤労奉仕の総務として20回くらい、麗澤大学学生の皇居勤労奉仕のアドバイザーとして5回くらい参加させていただいた。これも振り返ってみると思ってもみなかったありがたいめぐり合わせである。

鈴木康之先生は宗教学が専門であり、麗澤高校の先輩でもあり、公私ともどもいろいろとお世話になった。先生の誘いで、「まだまだ」と名付けられたエッセイの会にも長年所属してきた。毎月、エッセイを書いて出し、出されたエッセイの中から投票によって月間賞として、一番よかったエッセイを選ぶという会である。学園・研究所の教職員のほぼ同年代の男性、5、6名で構成され、当番になった人の自宅で会が開催される。おかげさまで、おりおりの自分の体験や思ったことがエッセイとして残っていつている。

麗澤大学での共同研究で、小田川方子先生をリーダーに、欠端先生、鈴木先生、安藤靖治先生とともに、癒しについて、死生観について研究したこと、その関連で、巡礼が行われる秩父の寺院や、四国八十八ヶ所の巡礼の札所のいくつかを調査旅行したり、天理教の本部を調査旅行したりしたことも忘れられないことである。

立木教夫先生が主宰する朝の英語のクラスが、研究部の若手の研究員を中心に行われていたが、それにも鈴木先生の勧めで所属し、その後、長年参加してきた。モラロジー専攻塾ができてからは、そのカリキュラムの一つに位置付けられ、塾生とともに、朝、7時50分から9時前まで、AFNニュースのディクテー

ションと英書の輪読を中心とする英語のトレーニングを30数年続けてきた。自分の英語の力はこれによって確実に上がってきたと思う。

インドとのかかわりでは、麗澤大学とタゴール国際大学が交流協定を結び、毎年、学生を教員が引率し、タゴール国際大学やコルカタで研修することになった。2回、引率を体験し、改めてインドの面白さ、魅力に引き付けられている。我妻先生が存命中に、交流協定が結ばれていたらよかったが、それでもこうしてタゴール国際大学との関係ができて、タゴール国際大学の日本語学院の設立に大変な努力をされた我妻先生も喜んでくれていると信じている。機会をみつけてインドに行きたいと思っている。

現在、息子たちもそれぞれ就職し、長男は結婚し、昨年5月に、子供（私にとっての初孫）が生まれた。夫婦二人で暮らしている。毎朝、6時前には自転車で5分くらいのところにある中原ふれあい防災公園に行き、散歩したり、太極拳、自彊術、コーラスに参加したり、英語を高齢者の皆さんに10分程度教えることを楽しみにしている。

光ヶ丘中部町会の町内会の班長をしているが、家内にすべてを任せるのではなく、少しは町内会にもかかわるようになった。

定年後の生活をどのようにしていくか考えつつ、まずは研究室の本や、インドで買ったインドの衣服やさまざまな物をどう処分するかに手をつけていかなければならない。（平成30年12月5日記す）



竹内 啓二 教授 略歴

生年月日 昭和28年4月6日

学歴

1978年 麗澤大学外国語学部イギリス語学科 卒業
 1980年 筑波大学大学院修士課程地域研究研究科 修了
 1985年 インド国立ヴィシュヴァ・バラティ大学博士課程 哲学・比較宗教科
 修了

学位

1980年 国際学修士（筑波大学）
 1985年 哲学博士（Ph. D.）（インド国立ヴィシュヴァ・バラティ大学）

職歴

1984年6月～2001年3月 財団法人モラロジー研究所研究部 研究員
 2001年4月～2009年3月 財団法人モラロジー研究所道德科学研究センター
 人間学研究室 主任研究員
 2009年4月～2010年3月 財団法人モラロジー研究所道德科学研究センター
 人間学研究室 室長・教授
 2010年4月～2018年3月 公益財団法人モラロジー研究所
 道德科学研究センター 人間学研究室 室長・教授
 （兼務）
 2019年4月～現在 公益財団法人モラロジー研究所
 道德科学研究センター 人間学研究室 教授（兼務）

1992年4月～1998年3月 麗澤大学国際経済学部 助教授
 2002年8月～2003年8月 米国ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所
 客員研究員
 1998年4月～2008年3月 麗澤大学国際経済学部・麗澤大学院国際経済研究科
 教授
 2008年4月～2019年3月 麗澤大学経済学部・麗澤大学院国際経済研究科
 教授

麗澤大学比較文明文化研究センター副センター長、麗澤大学道德科学研究センターセンター員を務めた。

NPO法人 千葉県東葛地区・生と死を考える会（任意団体として1993年に設立、2011年10月にNPO法人として登記した。）任意団体の頃は、世話人の一人、事務局長を務め、NPO法人になってからは、副理事長・事務局長を務める。

専門分野：近・現代のインド思想、比較思想、死生学、生命倫理学

所属学会

比較思想学会、日本印度学佛教学会、日本宗教学会、日本南アジア学会、大学教育学会、比較文明学会、国際比較文明学会、日本生命倫理学会、地球システム・倫理学会

専門分野：近・現代のインド思想、比較思想、死生学、生命倫理学

担当科目：比較思想A・B、道德科学A・B、インド社会論、英語総合講座C・D、麗澤大学大学院で、「アジア研究特論」、「英語原典講読」

【著書】

（単著）『近代インド思想の源流—ラムモホン・ライの宗教・社会改革』新評論 1991年
 （単著）*The Philosophy of Brahmo Samaj: Rammohun Roy and Devendranath Tagore*, Bookfront Publication Forum, Calcutta, India, 1997
 （共著）小田川方子・欠端實 編著『生と死の深み——アジアとヨーロッパにおける再発見』廣池学園出版、1997年、IV章の「タゴールの死生観」を担当。
 （共著）小田川方子・欠端實 編著『「癒し」の思想—伝統から未来へ』麗澤大学出版会、2002年、「死別の悲しみの癒し」を担当。
 「ブランモ協会と近代インド精神の形成—デイヴィッド・コフの著作紹介」我妻和男編著『光の国・インド再発見』麗澤大学出版会 2005年
 編著『いのちと愛の思想—廣池千九郎の聖人研究の継承と発展』モラロジー研究所、2013年

【翻訳】

（共訳）マハトマ・ガンディー著『わたしにとっての宗教』新評論 1991年
 リン・アン・デスベルダー「デス・エデュケーションの使命—死を学び、感じること」水野治太郎、日野原重明、アルフォンス・デーケン編著『おとなのいのちの教育』（河出書房新社2006年）所収。